

# クラシック音楽演奏家のジャズ音楽のフレーズ認知に関する 調査と考察

## A Discussion about Rhythm and Phrase Recognition of Jazz Ad-lib Phrases of Classical Music Performers

安藤 大地<sup>1\*</sup>  
Daichi Ando<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 首都大学東京システムデザイン学部

<sup>1</sup> Faculty of System Design, Tokyo Metropolitan University

**Abstract:** The author has conducted a survey that rhythm and phrase recognition when classical music performers score based sight-read about jazz adlib solo. Classical music performer generally takes the 1st and 3rd quarter as accented beat when they perform 4/4 beat phrases. However the jazz performer generates their adlib phrases, taking the 2nd and 4th quarter as accented beat. Thus sight-reading the generated phrase for the classical music performers is difficult. In this paper, the author reports the survey that records the processes that the classical music performers sight-reading jazz blues adlib phrases, changing the accented beat, then considers based on the results.

### 1 はじめに

日本でアマチュアが演奏する典型的なジャズであるビバップスタイルの演奏は、その曲本来の主旋律（テーマ）と和音指定をコードネームを使って表記したもののみが書かれた「リードシート」を元に行われる。基本的には最初にテーマを1ループ（1コーラス）演奏し、その後はコードだけを元にした即興演奏である「アドリブソロ」をバンドの全奏者が1コーラス以上行い、最後にテーマをサイド演奏し、終わる。ビバップスタイルの演奏ではアドリブソロが一般的に最重要視されており、コードを元にした即ち調性的 (Tonal) な即興演奏が1曲の演奏の大部分を占めているポピュラー音楽でも珍しい形態になっている。

高橋らはジャズ演奏家の音楽認知について比較的多くの被験者を元にした量的調査を行なっている [1, 2, 3]。この調査結果は、音楽を聴取した時の特にハーモニー、特にコードトーン（と対応するスケール）の連想に関して、一般人とジャズ演奏家の間に違いが生じることを示している。ただしジャズ演奏家を対象としているにも関わらず、ジャズ特有のテンションノートなどを積極的に扱っている調査ではないことから、クラシック演奏家も同様の結果になるのではないかと予想される。リズムに関しては高橋らの調査では行われていない。

クラシック演奏家がジャズやポピュラーなどのスタンダード曲を演奏するのは、現代日本におけるコンサートプログラムの都合上一般的であるが、特にジャズの曲・ジャズのソロ演奏をコピーする時に、根本的なリズムの違いの問題から、そのニュアンスを出せないばかりか、単純な音取りでも難を生じることがある。クラシック音楽や多くのポピュラー音楽とジャズとのリズムの違いで代表的なものはスウィング<sup>1</sup>であるが、その他に演奏家の認知上大きく違うのが4/4拍子における強拍の位置の違いである。

クラシック音楽や多くのポピュラー音楽の場合、4/4拍子の曲における強拍は1, 3拍であり、そのためクラシック演奏家はフレーズのリズムの内在化を1, 3拍を強拍として行う訓練を受けている。これは、合奏などで指揮者が小節頭を叩くだけでも合奏が可能であることが示している。しかしジャズのアドリブソロ演奏では、演奏家の認知上1小節という単位はキープするものの、強拍が2, 4拍であることから、クラシックの演奏家はそのフレーズのリズムの内在化を行おうとした場合、戸惑いが起きる。

ジャズのスタンダード曲のテーマは、古いものだと

\*連絡先： 首都大学東京システムデザイン学部  
東京都日野市旭が丘 6-6  
E-mail: dandou@tmu.ac.jp

<sup>1</sup>八分音符が2つ以上続く時、2つセットで三連符の四分+八分に近い感じにリズムが変化する。正確には、前に位置する拍は三連符2つ分よりも若干短く、後ろに位置する拍は三連符1つ分よりも若干長いという微妙なニュアンスであり、速度によっても長さの割合が変わる。これもクラシック奏者がジャズを演奏する時の問題点になっている。

ヨーロッパ系の歌謡曲をベースとしているものが多く<sup>2</sup>、テーマの演奏に関してはこの問題が発生することはあまりないが、ジャズ演奏家のアドリブソロ、特に黒人演奏家のプレイでは2, 4拍を強拍とすることを前提とした旋律が多く、ヨーロッパ系のリズムをベースに把握しているクラシック演奏家には認知しづらいものになっている。

例えば著者自身（クラシックで音楽学部声楽専攻に入学経験を持つ。ジャズを本格的に学び始めて2年程度）が楽譜を使ってアドリブソロのコピーを行う場合、基本的にジャズスタイルの2, 4拍を強拍として2拍打ちで音取りを行うが、それでも最初に楽譜を見た時の音取り段階ではフレーズのリズム内在化が不可能なことがあり、その部分だけ4拍打ちで音取りをする、いわばジャズ本来のリズムを使わずに音取りをしなければならないこともある。

またクラシックの演奏家の場合、そのフレーズを内在化できてしまうと、このような拍打ちの切り替えは演奏家の意識の中で「無意識的に」もしくは「演奏表情として」行われることも多いため<sup>3</sup>、調査が難しい問題である。

図1は、Charlie Parkerの*Charlie Parker Bee Boppers*(1945)収録の*Now's the Time*[4]のCharlie Parker自身のアドリブソロを譜面に起こしたものである。*Now's the Time*は12小節を1コーラスとするジャズブルースのコード進行を持った曲の譜面である。キーはFである<sup>4</sup>。ソロは曲中21小節目から始まり3コーラス分である<sup>5</sup>

図2は、このソロを著者自身がコピーした時に、2, 4拍を強拍として音取りをするとリズムが非常に取りづらかった箇所を赤色で囲んだものである。「弱起で引っ掛けて旋律をスタートしているが、クラシック的な感覚でいうと弱起直後の小節の頭で強拍を感じさせる旋律が来るはずが、それが無い」という箇所であらう。と著者は捉えている。(幼少期に楽譜ベースのピアノ演奏を習得した経験がある演奏家の意見とは異なっており、これについては4.2.2節で後述する。)

著者と同じような傾向でなくても、リズムの取り方により音取りがしやすい箇所としづらい場所がわかれるようなことがクラシック・多くのポピュラー音楽で起きるのではないかと著者は予想した。クラシックのプロ演奏家は、その場で渡された楽譜を読み、即座に演奏する「初見」<sup>6</sup>という能力を持っているが、ジャズ

図1: Charlie Parker *Now's the Time* のParker自身のアドリブソロ。Charlie Parker *Bee Boppers*(1945)収録。

図2: 著者自身が楽譜を元にコピーした時にリズムでつまづいた箇所を赤色の四角で囲んで表示。著者の場合、弱起後の強拍を感じさせる箇所がクラシック的な感覚からずれている箇所がつまづきやすい。

<sup>2</sup>歌モノと呼ばれる。

<sup>3</sup>演奏表情の一つとしてカウントひいては拍子を切り替える行為は、オーケストラなどの指揮者の動きにも表れるため、観測しやすい。

<sup>4</sup>ブルースの性格上 Major, minor の判別をするのは難しいので主音のみで表記する。

<sup>5</sup>通常ジャズブルースは12小節1コーラスを2コーラス単位で演奏することが多いが、このテイクは1コーラス単位で演奏を行っている。

<sup>6</sup>課題としては新曲視奏とも呼ばれる

のアドリブソロの譜面起こしで初見を行う際につまづく箇所が存在するという事は、リズム感の違いによりクラシック音楽家がリズムの内在化を容易に行うことができない、認知モデルの違いのようなものが存在することになるのではないかと考えた。

## 2 調査手法

本節では調査方法の詳細を述べる。現段階ではクラシックサクソ演奏家4名(大学演奏専攻学部卒業程度2名, 大学院修士課程修了程度2名)の結果を得ている。

本実験は、被験者となりうる音楽大学演奏専攻学部卒業程度以上のクラシックサクソ演奏家の絶対数が少ないことから、今後の調査の発展を考慮に入れた上でなるべく多くのクラシックサクソ演奏家を調査対象としたいこともあり、移動などを伴う対面でもなくとも行えるメールのやり取りによる調査を行なった。

課題曲の楽譜(図1)とともに指示書をメール本文に書いて、クラシックサクソ演奏家にメールで送り、メールの返信によって結果を得た。

演奏家に楽譜とともに提示した実験指示文章は以下の通りである。

この楽譜の音取りをお願いいたします。(楽器は用いても読譜のみでも構いません)  
音取りの際の拍の取り方に制限を加えます。  
メトロノームは使わずに、ご自身で拍を打ちながら行ってください。

1. 2拍(2, 4)で取る
2. 2拍(1, 3)で取る
3. 4拍で取る

まず1.の(2, 4)の拍打ちで音取りをし、引っかかったところ、拍を見失いそうになったところをメモしておいてください。(丸で囲むなど)  
何度も練習せずに1回2回程度で大丈夫です。

次に2.の(1, 3)に拍打ちに変えて、それでもまだ引っかかるころ、拍を見失いそうになったところをメモしておいてください。(色を変えて丸で囲むなど)

最後に3.の4拍打ちに変えて、まだ引っかかるころ、拍を見失いそうになったところをメモしてください。

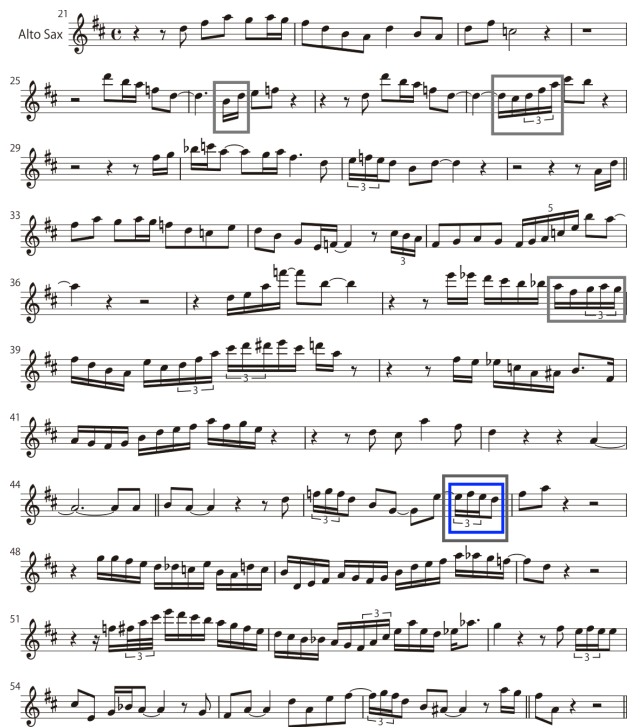


図3: 被験者1の結果。4拍打ちでつまづく箇所はなかった。

1. 2. 3.のそれぞれの結果を「楽譜の何小節目の何拍目」という形で、このメールに返信する形でお送りください。

結果は指示の通り、メール本文にテキスト情報で、1.の時「何小節目の何拍目」「何小節目の何拍目」.....2.の時「何小節目の何拍目」.....という形で得た。

## 3 結果

演奏者から得られた結果を演奏者ごとに楽譜に書き込み図示したものが、図3~図6である。2拍打ち(2, 4)でつまづいた場所を灰色、2拍打ち(1, 3)でつまづいた箇所を青、4拍打ちでもつまづいた箇所を赤の枠でそれぞれ囲んでいる。

被験者1(図3)は、2拍打ち(2, 4)だと引っかかり2拍打ち(1, 3)打ちだと取れる箇所が3箇所あり、2拍打ちの強拍違いで両方とも引っかかった場所が1箇所であった。4拍打ちでは問題がなかった。

被験者2(図4)は、2拍打ちの強拍違いで両方とも引っかかったのが1箇所だけで、強拍違いにより異なる場所が引っかかったと回答している。

被験者3(図5)は、4拍打ちでも引っかかった場所を除くと、被験者2と同じく強拍違いにより異なる場所

図 4: 被験者 2 の結果. 4 拍打ちでつまづく箇所はなかった。

が引っかかったと回答している。4 拍打ちにしても引っかかっている場所は、スウィングした時にジャズ独特のリズムになる箇所であり、これは単純に慣れの問題だと考えられる。

被験者 4(図 6) は、4 拍打ちでのみ取れない箇所が存在した。三連符が取りづらいとの自己申告があったが、引っかかっている箇所は 51 小節目の 1 箇所だけのように見える。

## 4 考察と議論

前節で提示した結果を考察すると共に、結果を元にした音楽家との議論について述べる。

### 4.1 結果について

#### 4.1.1 強拍の位置の違いによる引っかかった箇所の違い

被験者 2, 3, 4 では、2, 4 打ちと 1, 3 打ちでは異なった箇所で見つかるケースが多い。これは強拍の位置の違いによるリズム内在化の違いが存在している可能性が高いことを示している。

図 5: 被験者 3 の結果。

#### 4.1.2 2 拍目の裏拍から始まる三連符を含む細かいフレーズ

28 小節目と 51 小節目の 2 箇所は、4 人の被験者のうち 3 人が引っかかっている。

28 小節目は被験者 1, 3 が 2, 4 打ちで引っかかり、被験者 2 が 1, 3 打ちで引っかかっている。51 小節目は同様に、被験者 2, 3, 4 の 3 人の被験者が引っかかっている。被験者 3 と 4 は 2, 4 打ち、1, 3 打ちの両方で引っかかっている。

この 28 小節目と 51 小節目は、小節の頭の音を伸ばした音符、もしくは小節の頭が休符の後に、2 拍目の裏拍から 16 分音符から三連符を含む細かい旋律がくるリズム形が共通しており、三連符の箇所、その後の 16 分音符が上手くはまらないことが多く、クラシック演奏家にとってリズムの内在化が難しいパッセージである可能性がある。ただし 28 小節目の方は、リズムの打ち方で演奏者により違いがあり、今後検討していく必要がある。

#### 4.1.3 2, 4 打ちの時の弱拍裏拍

53 小節目は、被験者 2 と 3 が 2, 4 打ちの時に同様に引っかかっている。ここは著者自身が引っかかる箇所として挙げた「引っ掛けてフレーズを開始するが、その後の強拍の感覚がずれている」箇所である。

図 6: 被験者 4 の結果.

また被験者 3 は同じリズムパターンである 46 小節目は 4 拍打ちでも引っかけると回答しており、三連を含むリズムパターンと強拍の感覚のズレが影響を及ぼしている可能性がある。

## 4.2 音楽家との議論

これらの結果と著者自身の考察をもとに音楽家と議論を行った。これまで述べてきた通り、これらの議論は基本的に推測をもとにしたものであり、また聞き取り調査にも現れにくいため、今後の調査手法の開発を行う必要がある。

### 4.2.1 4/4 拍子ではなく 2/4 拍子で捉えている可能性

「今回の被験者やジャズの演奏家は 4/4 拍子ではなく、2/4 拍子\*2 で捉えている人が多いのではないか」という指摘があった。フレーズのリズムの内在化だけならば「2 拍を 1 小節としそれを 2 回」でリズムを感じた方が単純化して行いやすいのは多くの演奏家にとって共通認識のように思われる。

Parker 自身のソロをこの「4/4 拍子 1 小節を 2/4 拍子 2 小節として捉える」点から考えると、単純に小節の頭が休符である頻度が大きく減ることになる。小節頭が休符の場合でもごく単純な弱起引っかけとして捉えることができ、その分強拍の位置をジャズスタイル

にしても認知しやすくなると推測できる。Parker はビバップスタイルの最初期の演奏家であり、それ以前に演奏されていたダンスホールでのダンスのための音楽であるニューオリンズジャズやスウィングジャズでは 2 拍子傾向が強いことから、これはある程度妥当な考察であると考えられる。

しかし、前述したようにクラシックの演奏家は演奏表情としてカウント切り替えを無意識的に行ってしまうため、聞き取り調査等を行うのも難しい。

### 4.2.2 強拍位置で発音しないことによる影響

「引っかかるのは単に強拍の位置に休符があるだけでは」という指摘があった。ピアノを最初に学んだ音楽家の場合、ピアノの学習に使われる曲は基本的に独奏曲であり、左手も右手も動いていない箇所は曲中に存在しないため、休符をカウントするという感覚が身につくにつづらく、引っかけやすくなるのではないかと著者は推測している。

### 4.2.3 演奏者の演奏経験によるリズム把握・内在化の違い

前節で述べたピアノ学習者と管楽器学習者は休符カウントの能力が大きく違っているのではないかと著者はさらに推測している。

今回被験者としたサクソフォンの演奏家は、音楽の演奏を小学校・中学校・高等学校の吹奏楽部で始めたケースが多い。吹奏楽は基本的に自身が演奏する部分だけが書かれているパート譜を元に演奏するため他のパートがどのように動いているかに依存しない、休符や小節のカウント能力が高いのではないかと、という推測が著者と他音楽家の間でなされた。独奏曲でも伴奏譜なしで演奏するサクソフォン奏者は多い。これはスコア（総譜。他のパートも全て書かれている）を見て演奏するタイプの楽器、つまりピアノ独奏、合唱、伴奏譜面有りの独唱などで音楽を学んだ演奏家が和音の開始やパート間の掛け合いで自分のパートのフレーズの入りのタイミングを測るのと対照的であり、もし吹奏楽経験者にそのような傾向が見られればリズムの内在化を行わなくてもフレーズ認知を速やかに行うことができるのではないかと推測している。

吹奏楽経験者のカウント能力が高いと考え、図 2 で示した著者が音取りの際に引っかけた「弱起で入った後の強拍がクラシックの感覚からずれている」点で引っかけられないことも納得できる。

もちろん単純に楽器演奏と歌唱の訓練過程におけるソルフェージュ能力の差という可能性もあり、現段階では完全に著者の推測の域を出ないが、今後の調査の必要性がある。

## 5 おわりに

本報告では、Charlie Parker のソロをプロのクラシック演奏家に音取りをしてもらい、引っかかった箇所を報告してもらうという調査を行い、結果に対して考察を行った。いくつかのリズムパターンで被験者間に共通の「引っかかりやすい場所」が現れた。さらに演奏家が実際にどのように把握しているかについて、いくつかの手がかりが得られた。

一人一人技能やバックグラウンドが異なる音楽家の認知を定量的に評価するのは難しく、現状では推測を重ねるしかないが、今後はさらに多くの被験者からデータを集め、即興演奏の知識化へ向けて、検討を行っていく。

## 参考文献

- [1] 高橋範行, 大浦容子. ジャズ学習者とクラシック学習者の音楽聴取行為における質的相違. No. 46, pp. 1-9, 2012.
- [2] 高橋範行, 大浦容子. ジャズ演奏者の音楽聴取能力. 平成 26 年度日本音楽知覚認知学会周期研究発表会資料, pp. 1-9, 2014.
- [3] 高橋範行. ジャズ音楽家の音楽認知技能 (坪井由実先生退職記念号). 愛知県立大学教育福祉学部論集 = Bulletin of the Faculty of Education and Welfare, Aichi Prefectural University, No. 64, pp. 63-67, 2015.
- [4] Charlie Parker. *Now's the Time in Charlie Parker Bee Boppers*. CD, 1945.